

安積良斎の漢詩文の世界とその引用典籍

菊田 紀郎

1. はじめに

安積良斎 (1790～1860) は、『日本漢文学大辞典 (明治書院, 昭60・3刊)』によれば、おおよそ、次のような略歴を有する人物である。

福島県郡山の人。名は重信・信。字は思順、通称は祐助。号は良斎・見山楼。幼時から学を好み、二本松藩儒今泉徳輔などに従学し、十七歳のとき江戸に出て、佐藤一斎・林述斎に学んだ。二十四歳で神田駿河台に塾を開き、良斎文略三卷 (1831) を著すに及んで名声が高くなり、1851年幕府の儒官となり昌平黌教授となった。

なお、この寛政二 (1790) 年の出生説には異論もあるようであるが、良斎の活躍した分野の広大さは敬服に値するものがある。本稿では、彼の漢詩文における貢献をたどるための一助として、天保八 (1837) 年の著述かと考えられている『南柯餘編』を対象に、そこに引用されている中国関係の典籍を中心に、良斎学の基盤に関し考察してみたい。

『南柯餘編』は、三巻よりなり、字義・典故・史談及び雑事についての随録である。『日本儒林叢書 (第二巻)』に収載されており、岩手大学人文社会科学部中村安宏助教授の紹介による。

標目は、上巻38項、中巻54項、下巻45項、合計137項に及ぶが、引用などで誤りと思えるものも散見するにせよ、いずれの標目も博引旁證を務めている。

2. 「詠富士山」詩と『南柯餘編』

「詠富士山」詩は、良斎の二十五歳のとき、即ち、文化十二 (1815) 年によまれた、名峰富士山を讚美した漢詩で、良斎の若々しさや気力の充実した様子のうかがい知られる作品である。まず、白文で原文を提示し、あとに書き下し文を添えることにする。(以下も、漢詩文に関しては、これと同様の方法による。下線の韻字についても、末尾に注記を加えた。)

詠富士山

秦皇採葉竟難逢 (冬韻・平声)

東海僊山是此峰 (冬韻・平声)

万古天風吹不折 (屑韻・入声)

青空一朶玉芙蓉 (冬韻・平声)

秦皇葉を採 (さぐ) れども竟に逢ひ難し

東海の僊山は是れ此の峰

万古天風吹けども折れず
青空一朵の玉芙蓉

この詩の大意は次のようである。「西の方、中国の秦の皇帝は、徐福などに不老長寿の薬を探し求めさせたけれども、ついに出会うことはなかった。おそらく、徐福が尋ねた東海の仙人の住む山は、この峰であろう。この峰は、万世から、天からの風が吹いても折れずに佇立しているような、青空に映える一枝の芙蓉（富士山の異称を芙蓉峰という）のような思いがする。」

末尾の韻字のみ記したが、その平仄法の巧みさ、そして、第四句末に置かれた「玉芙蓉」という表現の適切さ。とても、十七歳で上京して以来、わずか八年の歳月を経た青年のなしうる詩作とは思えないのである。

なぜ、「芙蓉」が「詠富士山」に採用されているのか。これも、「富士山」が「不二」に通ずるのは一般的であるが、「芙蓉峰」が富士山を意味するものであり、かつ、それを詩末に位置づけるという技巧は見事なもの以外云いようがない。

次に、「詠富士山」詩作から二十年余ののちに執筆された『南柯餘編』の中巻、標目順位 23 番目（以下、「中㊸」のように表示する。）に「徐福祠」が見られる。

この文章は、漢詩文には属さないもので、書き下し文のみによって示すことにする。（以下同じ。）

紀州熊野山に徐福の祠あり。世の伝へに徐福秦の乱を避けて、童男童女を載せ、海を航して帰化せりと。童男女相配して民となし、その子孫皆秦を以て姓となす。又、国中に美多羅斯村あり。徐福の墓存せり。（中略）又、朝鮮の洪彦弼、海東諸国紀にいふ。「孝靈天皇七十二年壬午（筆者注、B.C.219 年か）、秦の始皇徐福を遣はし、海に入りて仙を求めしむ。遂に紀伊州に至る」と。（下略）

良斎によれば、この洪彦弼の説に関し、「尤もその実を得たりとなす」と評しているが、『中国学芸大事典（大修館書店、昭 53.10 刊）』付載の年表にも「始皇帝二十八年 壬午 始皇帝、徐福に命じて不死の薬を東方海上に求む」とあり、『南柯餘編』に記された記録が、一般的に喧伝されていたものであったことを示している。

「詠富士山」詩における「東海僊山」には、叙上のような良斎漢詩の背景が存在していたことを思わせる。わずかな、七言絶句の漢詩を巡っても、かくの如き良斎の広大な基盤がその下部に流れていると言いうるのである。

3. 「辞達」という表現を巡って——良斎「文論」の成立過程の一側面——

徳富蘇峰は、良斎の業績を讃して、概略次のような賛文を寄せている。なお、これは、郡山市安積国造神社境内に良斎の肖像と共に記載されているレリーフから摘記した。

- (1) 宋学ヲ主トスルモ必ズシモ拘泥セズ。
- (2) ソノ文章暢達明快、自ラ一家ヲ成ス。
- (3) 人ヲ誨ヘテ倦マズ。
- (4) 性山水ヲ愛シ、富貴刺達浮雲ノ如シ。

これらの中で、文章論に関する個所をとり出せば「文章暢達明快」、即ち、文章が伸び伸びとして、かつ、わかり易いものであるという指摘に尽きる。

次に、良齋の伝記をまとめた石井研堂が、大正五年十月に、安積良齋先生頌徳祭郡山協賛会から刊行した『安積良齋先生略伝』に、「6、先生の詩文」（同書、13～14頁）として記している内容にふれておきたい。

先生の文章は、文略正統六卷、遊豆東省紀合刻一卷、其他史伝数冊等ありますが、先ず其の結構が清新で人の意表に出で、其用字用句が独創で、流麗多趣味、之を熟読玩味しますと、名家の画を観ると同じ快感を得ます。（中略）ただ、これまでに仕上げますには、腹に古今百家の長所を蔵し、之を経緯し、之を陶冶する天才を要し、其努力其精苦、尋常のことではありませぬ。（下略）

即ち、良齋の文章は、構想に斬新さがあり、使用する文言は独創的、文章が流れるようになだらかに進行し、趣向にも富んでいる。しかしながら、こうした文章を作成するためには、大いなる努力・苦心が存したはずであり、多くの先人達の文章法を学び鍛錬を経たたまものなのである、というのである。

良齋の文章表現について、その考えをまとめたものに「文論」（『良齋文略続・巻二』二十四・二十五丁所収）がある。その前半部分を、書き下し文により示すと、次のようになる。なお、（ ）内は筆者による注記である。

凡そ文を作るの法、必ずしも六経（詩・書・礼・楽・易・春秋のこと）ならざるなり。必ずしも秦漢ならざるなり。必ずしも唐と宋と元明とならざるなり。辞達するのみ。＜下線：筆者、以下同じ＞

彼の經典を剽剝し（非難するの意）、子史を襲踏し、湊合補綴し（よせ集め補いをしの意）、錦穀を裂きて之を紐（な）ふが如きは、之を辞達すと謂ふべきや。

韓柳（韓愈・柳宗元のこと）の文を規撫し、欧蘇（歐陽脩・蘇軾のこと）の法を模倣し、精を啜（すす）り華を咀らひ、その繩尺（規準の意）を守る。之を辞達すと謂ふべけんや。

吾いはゆる辞達すと云ふもの、能く自ら胸臆を攄（おも）んばかり、機軸を出だし、而して一家言をなすものなり。（下略）

即ち、文章を作成するというのは、ことばによって筆者の伝達をはかることであって、中国の古典や唐宋八家のような秀れた文章家の模倣をすることではない。自分自身の胸の奥を熟考し、新しい趣向を考え出し、そして、自身に貫く考えを通していくことが「辞達」であり、文章法の究極に達するものであるというのである。

この『良齋文略続』の刊行は、嘉永六（1853）年のこと。良齋没年の七年以前の記述で、いわば、彼の文章論の集積とも考えることができる。

前述したように、石井研堂は、良齋の文章の特色として「結構の清新さ、用字用句の独創性」を指摘している。研堂著『安積良齋詳伝（東京堂書店、大5・4刊）』にも、「第十四、文章と詩」の中に「三、文章論」（同書、102～105頁）として、この「文論」の書き下し文が掲載されており、本稿と同様の結果に到達したのかもしれない。

ところで、『良齋文略続』の刊行に先立つこと、十六年。天保八（1837）年の著述かとされている『南柯餘編』（下巻）の中にも、「辞達」に関し、以下のような記述がなされている。それは、「下⑤ 蘇長公文を論ず」の記載であって、蘇長公とは、良齋の尊崇する蘇軾（蘇東坡とも

いう) のことである。

(上略) 又(蘇長公)云ふ。「(文字は)大略, 行雲流水の如く, 初より定質なし。但だ, 常にまさに行くべき所に行き, 常に止まらざるべからざるに止まり, 文理は自然, 姿態横生なり。

孔子曰く。『言これ文(あや)あらざれば, これを行ふも遠からず』と。又曰く。『辞達するのみ』と。

夫れ, 言は意を達するに止まり, 文あらざるがごときを疑ふ。是れ, 大いに然らず。物の妙を求むるは, 風を繋ぎ影を捕ふるがごとし。能くこの物をして心に了然せしむるもの, 蓋し千万人にして一遇もせざるなり。而して, 況んや能く口と手とを了然せしむるものをや。是れをこれ辞達すと謂ふ。辞, 能く達するに至れば, 則ち, 文勝(あ)げて用ふべからず』と。(中略) 坡公(蘇長公のこと)の此の語, 蓋し皆平昔, 力を用ふる所のもの, 故に殊に味有り。

この『南柯餘編』の記述を, 概括的に解釈してみると, 次のようになる。

文章は, 行く雲や流れる水のように, 初めから定まった本質はなく, 進むべきところへ進み, 止まらねばならないところに止まるものです。文章の修辞や筋目は自然にまかせ, 表現も自在です。

孔子は「言葉に修辞がなければ, 奥深くまでは行き届かない」とも, 又, 「言葉は意志を伝えればよいのだ」とも云っています。

そもそも, 言葉は意志を伝えればよく, 修辞を必要としないかといえば, そうではありません。物の真髄を求めようとするのは, 風をつなぎ影をつかまえるようなもので, その物を心にはっきりさとらせることのできるの, 千万人もいても一度出会うこともない程です。まして, 口で話し, 手で書き表わしてはっきりと, さとらせることができるのは, なお困難なものがあります。「辞達」の文章とは, こういうものを云うのです。言葉が意志を伝えることができれば, 特に, 修辞は必要としないのです。

こうした蘇長公の文章論について, 良齋は, この標目の文末で, 「坡公此語 殊有味」と評している。つまり, 良齋の文章論というものは, 蘇軾の説く「辞達」が根底にあって, それ故にこそ, 蘇峰のいう「ソノ文章暢達明快, 自ラ一家ヲ成ス」という伸びやかさが見られると考えられる。

こうした, 良齋「文論」の完成点(『良齋文略統』をさす)に至る道程として, 碩儒良齋の素養の一端を, 『南柯餘編』の記事に探り出すことができる。この意味からも, 良齋研究の視点をこの書に求め, そこからの発展・伸長の基礎的考究が必要になるのである。

4. 漢詩「秋日雜吟」及び「漁翁」

安積良齋の文章を検討するにあたり, 第一にとり上ぐべきは, 彼の漢詩文の才であろう。江戸中期の漢詩壇をみてみると, 徂徠派が古文辞や唐詩に力点を置き, 東の市河寛齋, 西の菅茶山を中心に宋詩の提倡に走り, 特に詠物・詠史などを文学性に富む宋詩が可能にしたことによ

り、漢詩もまた、宋学の隆盛と共に盛んなものとなっていった。

やがて、天保から安政にかけては、「聖堂派」と称する昌平黌及びその周囲の人々の活躍がめざましくなり、佐藤一斎と共に、良斎も、また、このグループに属することになる。しかしながら、時代は朱子学に固執せず、視野の広がりや要求していた。前項の良斎の「文論」の如き考えが誕生してきたのも、まさに、このような趨勢をうけてのものと思われる。

本項では、二篇の漢詩を通じ、蘇峰のいう「性山水ヲ愛シ、富貴刺達浮雲ノ如シ」に関し、詠物の中によみ込まれた良斎の心情を考察してみたい。

良斎漢詩に関しては、前項の「文論」が収載されていた『良斎文略統』（嘉永六（1853）年刊）に続けて、『附良斎詩略』が三十八丁付されている。ここでは、漢詩のみならず漢文の紀行文なども含まれ、その数110篇。特に、目につくのは「秋」を詠じた作品である。

そこで、まず、「秋日雑吟」（十八丁裏）なる「秋」の漢詩を論究してみたい。この「秋日雑吟」は、七言律詩が三部構成をなし、全てで二十四句からなっている。後述する福島県立博物館での講演（平成13年3月4日に開催）で、第三部についてふれておいたので、本稿では、第二部を検討してみたい。

秋日雑吟

書窓寂寞旧青氈（先韻・平声）
 涼冷侵肌欲著綿（先韻・平声）
 晴少午花猶有露（遇韻・去声）
 雨多秋樹已無蟬（先韻・平声）
 丹心一片誰相識（職韻・入声）
 白髮数茎祇自憐（先韻・平声）
 悔不紅塵揮手去（御韻・去声）
 五湖長泛釣魚船（先韻・平声）

書窓寂寞として旧青氈
 涼冷肌を侵し綿を著んと欲す
 晴少く午花猶ほ露有り
 雨多く秋樹已に蟬なし
 丹心一片誰か相識らん
 白髮数茎祇（ただ）自ら憐れむ
 悔ひは紅塵手を揮（ふ）って去り
 五湖に長へに釣魚の船を泛かべざりしことを

この詩の大意は次のようである。「窓辺に人氣もなく古い青畳のあるだけ。涼しさが身をおそい、綿入れを着ようと思う。晴天が少なく、日中も花に露が残っており、雨が多いので、蟬もすでにどこかへ行ってしまった。一片のまごころを誰が知ろう、何本かの白髪をみて、自分自身を憐れむほかない。後悔するのは、煩わしい俗世間に別れ、五湖で思う存分に釣り舟を浮かべなかつたことだ。」

構成をみていくと、「自己の周囲の静寂さ→小動物や天象の動き→俗世を避けての居住」の順に排列し、これは、「秋日雑吟」の第三部においても同様である。このような発想は一般的な発想であるが、「露・蟬」などに独自性がみとめられる。

ここに、極めて類似した発想に、宋代の詩人、梅堯臣（1002～1060）の「秋雨」という五言律詩がある。梅堯臣は字を聖俞といい、深遠古淡を宗として、歐陽脩も及ばずといわれた人物である。なお、書き下し文のみで示すことにする。

秋雨 梅堯臣
 雨後秋気早く 涼帰りて室廬清し
 既に蚊蠅の勢いを摧（くだ）き
 蛩蟬（こおろぎと蟬）の声を壮んらしむに任す
 石榴（ざくろの実）枝より墜ちて熟し
 蒼蘚（青い苔）階に縁りて生ず
 門を閉じて且（しばら）く高臥せん
 泥塗（泥だらけの道、汚世のこと）に向かひて行かんことを畏る

この梅堯臣（聖俞）は、『南柯餘編（上巻）』の「上^③婆餅焦」に以下のように引かれている。

按ずるに、梅聖俞の禽言詩に云ふ。「婆餅焦、児食らはず。爾の父何に向ひてゆくや。爾の母の山頭（死体焼き場の意）化して石となるも、山頭の化せる石、奈何にすべし。遂に微禽となりて啼きて息まず」と。

ここは、「婆餅焦」とは「鶯」なのか否かを論証するための引用個所で、その一部に、梅堯臣の「禽言詩」を採用しているのである。従って、良斎の関心が、梅堯臣にも及ぶことが判明し、先述した「秋雨」詩との関連も十分に考えるわけである。

次に、良斎関連の新出資料『文詩評釈』所収の漢詩「漁翁」について、その添削例も添えて、良斎詩の世界を考究してみたい。この『文詩評釈』は三巻よりなり、編者は久留米藩士佐田白茅（1832～1904）、巻一・二の刊年が明治十五年八月、巻三が明治十六年二月。発行所は東京向島の大来社となっている。

この書の中で、良斎は、その弟子にあたる斎藤竹堂の「黒滝山」という漢詩文に関し、添削指導をこころみている個所も存在して、良斎の、弟子達に対しての漢詩文指導の実践例が判然となるのである。

なお、この「黒滝山」の添削の末尾に、編者佐田白茅は次のように記している。

文壇ニ有名ナル竹堂先生（斎藤竹堂のこと）ノ紀行文ニシテ良斎先生ノ刪正批評ヲ加ヘタル名文ナレバ、精密ニ熟読シテ一字モ放過スベカラザルナリ。

『文詩評釈（全三巻）』（現、福島県立博物館蔵）は、福島県立図書館専門司書、菅野俊之氏の手になる「安積良斎著書一覽」にも記載がなされておらず、筆者も管見を有していない。

ところで、『文詩評釈（巻三）』から良斎詩及びその批評を引用することとする。

漁翁
 緑簑影動晚風清（庚韻・平声）
 獨向江村棹月明（庚韻・平声）
 水浅洲前船不進（震韻・去声）

蘆花一夢待潮生（庚韻・平声）

緑簑影動きて晚風清し
 独り江村に向ひて月明に棹さす
 水浅く洲前船進まず
 蘆花一夢潮の生ずるを待つ（下線部：菊田）

上記の書き下し文の下線部を、佐田白茅は次のように訂している。

水浅く→蘆荻
 蘆花一夢→残瓢酔を為して

更に、編者佐田白茅により、以下のような評言が付されている。

此詩ハスナドリスル翁ヲ詠ジタリ。前二句ハ江村ノ夕景ト漁翁ガ月ニ棹シテスナドリスル事ヲ述ベ、後二句ハ漁翁ガ漁業スルオリ舟ガ蘆ヤ荻ノ在ル洲ノ前ニ至リテ、トキ悪シク退潮ニテ舟ガ進マヌユエ先ヅ此處デ瓢ノ残酒ヲ飲ミ心地ヨク一酔シテ潮ノ生ジ来ルヲ待タント淡淡タル生涯ニテ、実ニ会社ノ外ニ一閑地ヲ占メタルモノヂャト云フ意ナリ。

漢詩の光景に関しては、白茅の「評言」に尽きているが、二箇所改訂について、以下のような評が加えられている。

松島北渚（1814～1844）評「改作洵ニ当ル」
 藤森天山（1799～1862）評「為酔作一酔。更妙ナリ」

即ち、天山は、白茅の訂した「酔を為して」を「一酔」とした方が更に秀れているというのである。白茅の改作は「残瓢為酔」に主眼があり、そのため「蘆荻」を前に出したものかと思われる。筆者には、白茅の改作に状況把握の重複が感じられ、おそらく良斎の志したであろう「蘆花浅水（あしの花咲く水浅き場所）」という情緒が薄れてしまうのを覚える。

これは、司空曙（720～790頃）「江村即時詩」に見える「縦然として一夜風吹き去り、只蘆花浅水の辺在り」という情景を心に描きつつの良詩でもあろうかと推察する。ちなみに、司空曙は、唐の詩人、磊落にして奇才あり、権与にこびず清貧に甘んじた人物とされ、良斎の崇敬すべきパターンの人材であったことが推察できる。

また、こうした老翁と漁業、残瓢の酒と一夢といった取りあわせは、『南柯餘編（中巻）』の「㊟戒石銘」で著名な黄庭堅（山谷）（1045～1105）の詩にも存在する。いま、彼の「清江引」を書き下し文によって示す。

清江引 黄庭堅
 江鷗 揺蕩 荻花は秋
 八十漁翁 百憂えず
 清暁 蓮を采（と）り来て槩（水面のこと）を盪（ゆる）がす
 夕陽 網を収め更に舟を横たう

群兒 漁を学ぶ亦た悪しからず
 老妻 白頭 此れより楽し
 全家酔って 篷底（とまの下のこと）に着して眠り
 舟は寒沙に在り 夜 潮落つ

黄庭堅の師と仰ぐのは蘇軾、良詩の師もまた、その第一に挙ぐべきは蘇軾である。ここに、良齋による、「中^㉔ 戒石銘」の冒頭部分を記しておく。

予の郷、官庁前に巨石竦立（しょうりつ、高くそびえ立つの意）す。其の上に、「爾俸爾祿は民の膏民の脂なり。下民は虐げ易きも上天は欺きがたし」の十六字を刻む。云はば、是れ、黄山谷の戒石銘なり。案ずるに此の銘、宋の紹興（1131～1162）より以来、郡県庁事、皆石を立て之を鐫（ほ）らしむ。其の語簡にして意深く、吏胥の氷鑑となすに足るを以てなり。

福島県二本松市の霞が城内に佇立する巨石に刻まれた、この「戒石銘」は、藩儒であった安積良齋の最も親炙した銘文で、その作者黄庭堅にも親近感を抱いていたであろうこと想像に難くない。この銘文は、当時の官吏に示したものであって、ほぼ、次のような内容となる。

お前達の俸祿は、全て、民衆の労働の結果によるものである。お前達は民衆を虐待することは簡単なことであろうが、天を欺き続けて為政に関わることは困難である。

以上、二篇の漢詩に詠じられた良齋の心情、及び、それらと梅堯臣・黄庭堅の漢詩との関連について述べた。共に、宋代の詩人からの影響下にあり、蘇峰の記した「性山水ヲ愛シ、富貴刺達浮雲ノ如シ」との良齋の生きかたの一端がうかがわれたかと考える。

5. 『南柯餘編』（上・下巻）引用典籍考

ここでは、まず、『南柯餘編（上巻）』に引用されている中国書籍を主とした典籍に関し考察し、もって、良齋の有している素養の淵源に迫ってみたい。典籍は、時代順に掲出し、『南柯餘編』の排列に従った。また、下巻にも重出する典籍は、〔 〕内に示したが、下巻のみで、上巻にみとめがたい典籍については後掲に従った。（ ）内の数字は標目順、同一標目内の複数引用は識別をしなかった。

なお、今回の調査により、典拠の確定しがたい書籍も存在するが、これらは他日の調査にまつこととし、註記や唐代以降で著者名のわかる典籍は、「＝」で著者名を示してある。

<西周>

- 詩経（4）②⑬⑭〔下：⑳〕
- 礼記<曲礼とも>（7）⑤③③〔下：⑥⑭⑲③③④〕
- 尔雅（3）⑩〔下：①⑩〕
- 山海経（2）⑩〔下：⑩〕

掲出された標目に関し、上⑩「弁服（異民族の衣服をいう）」及び下⑩「提燈児（長唇の子のこと）」における『尔雅（郭璞注を含む）』・『山海経』の引用項目の共通性に注目される。上記

書籍以外に、下巻に見出せるのは次の通りである。

- 儀礼<礼経とも> (2) [下：⑰⑳]
- 周礼 (2) [下：㉔㉕]

<春秋，戦国>

- 孝経 (2) ① [下：④]
- 春秋左氏伝<左伝とも> (8) ⑥⑩⑪⑳ [下：⑮⑯⑳㉑]
- 尚書 (5) ⑧⑭⑳ [下：①⑯]
- 莊子 (3) ⑪㉔ [下：⑤]
- 荀子 (1) ⑪

ここでも、上⑩「投蓋」及び上㉔「魚鱗鶴翼（日本の陣法的一种）」について、『左伝』・『莊子』更には『荀子』との引用標目の共通性に気がつく。なお、上巻に見られずに、下巻にみとめられる書籍は以下の通りである。

- 列子 (1) [下：⑩]
- 国語 (3) [下：⑫⑳㉑]
- 孟子 (7) [下：⑬⑭⑮⑯⑳㉑㉒]
- 韓非子 (1) [下：⑬]
- 論語 (4) [下：⑯⑳㉑㉒]
- 大学 (1) [下：㉑]
- 楚辞 (1) [下：㉓]

<前・後漢>

- 史記 (5) ②⑭ [下：①⑥㉑]
- 漢書 (7) ⑭⑱⑳㉓ [下：㉑㉒㉕]
- 淮南子 (3) ㉑㉒ [下：⑭]
- 揚子方言=揚雄 (1) ㉓
- 儀礼注=鄭玄 (1) ㉓
- 説文解字 (1) ㉑

上記以外の下巻に見られる典籍は次の通りである。

- 書経註=孔安国 (1) [下：⑥]
- 大学註=鄭玄 (1) [下：⑥]
- 神異経 (1) [下：⑫]
- 孟子章句=趙岐 (1) [下：⑳]
- 大戴礼 (1) [下：㉑]

なお、下⑥「黎民」については、いろいろの民族に関する記述で、『史記（始皇本紀）』の引用をはじめ、『書経註』・『大学註』のような註記引用が多出している。

<三国，西・東晋>

- 孔子家語 (2) ⑪㉑
- 古今注=崔豹 (1) ㉓
- 博物志 (1) ㉑
- 広雅 (1) [下：⑥]

『広雅』からの引用のある下⑥「黎民」に関しては前述した。

<南北朝>

- 文選 (2) ⑱〔下：⑳〕
- 水経注＝酈道元 (2) ㉓〔下：㉔〕
- 魏書 (1)〔下：⑳〕
- 劉勰新論 (1)〔下：㉑〕

<唐, 五代>

- 陸徳明釈文 (1) ②
- 駱賓王詩 (2) ⑧⑳
- 北史 (3) ⑫⑳〔下：㉑〕
- 本事詩＝孟榮 (1) ㉒
- 開元天寶遺事＝王仁裕 (1) ㉔
- 唐書 (2) ㉘〔下：㉙〕
- 史記正義＝張守節 (1) ㉚
- 尚書故實＝李綽 (1) ㉛
- 法苑珠林＝釈道世 (1) ㉜
- 酉陽雜俎＝段成式 (1) ㉝
- 唐子西文録 (1) ㉞

同一標目に複数の引用典籍をもつのは、上㉘「金世相」の『北史』・『唐書』、及び、上㉚「王荆公（宋、王安石のこと、彼の字説が亡逸し伝わらないので、諸書から論証したもの）字説」における『法苑珠林』・『酉陽雜俎』の両書が、この唐・五代の著作としては、良斎引用書となっている。

なお、上記書籍のほかに、下巻に引用されているのは、次の一書である。

- 南史 (1)〔下：⑳〕

<宋>

- 雲谷雜記＝張昞 (1) ④
- 集古集＝歐陽脩 (2) ④⑤
- 古冢盆杵記＝岳珂 (1) ④
- 新唐書 (1) ④
- 困学紀聞＝王応麟 (1) ⑤
- 趙明誠録 (1) ⑤
- 賓退録＝趙與時 (1) ⑧
- 書集伝＝蔡沈 (1) ⑨
- 資治通鑑答問＝王応麟 (1) ⑭
- 程史＝岳珂 (3) ⑮⑳㉑
- 統通鑑＝李燾 (1) ⑰
- 朱子語類 (2) ⑱〔下：㉒〕
- 呉船録＝苑成大 (1) ㉔
- 文山集＝文天祥 (1) ㉚

- 武林旧事＝周密 (1) ②④
- 容齋隨筆＝洪遇 (1) ②④
- 五代史 (2) ②⑤〔下：⑤〕
- 東臯雜錄＝孫宗鑑 (2) ②⑤③③
- 資治通鑑＝司馬光 (3) ②⑧③③③②
- 猗覺寮雜記＝朱翌 (2) ③②③④
- 能改齋漫錄＝吳曾 (1) ③③
- 捫蝨新話＝陳善 (1) ③④
- 巧古質疑＝葉大慶 (1) ③④
- 峴山亭記＝歐陽脩 (1) ③⑤
- 尔雅翼＝羅願 (1) ③⑦
- 復齋漫錄＝趙彥肅 (1) ③⑧

宋代典籍における、この引用書籍の多様さには驚嘆する。蘇峰のいう「宋学ヲ主トスルモ必ズシモ拘泥セズ」の基底となる「宋学」は、『南柯餘編』に見える、叙上の典籍からも推察可能となる。特に、『集古集』・『峴山亭記』の著者欧陽脩、『困学紀聞』・『資治通鑑答問』の作者王応麟、『古冢盆杵記』及び『程史』の撰者岳珂への傾注、更に、司馬光著『資治通鑑』の尊崇という良斎の態度が顕著に読みとれるのである。

また、上③④「王荆公字説」に、宋代の作品の中から『程史』・『猗覺寮雜記』・『捫蝨新話』・『巧古質疑』の四典籍が含まれているが、これに関しては前項でふれた通りであり、良斎自身の王安石への傾倒がなせる結果かと考える。

上記の典籍以外に、下巻にみとめられる宋代書籍からの引用状況は下の通りである。

- 通志略＝鄭樵 (1)〔下：⑤〕
- 孟子集註＝朱熹 (1)〔下：⑥〕
- 小学＝劉子澄 (1)〔下：⑩〕
- 齊東野語＝周密 (1)〔下：⑱〕
- 陸象山集 (1)〔下：⑱〕
- 洪氏隸穢＝洪适 (1)〔下：⑳〕
- 道命録＝李心伝 (2)〔下：㉗⑳〕
- 朱子語録 (1)〔下：㉗〕
- 朱子文集 (1)〔下：㉗〕

下巻の宋代引用書の中で目につくのは、『小学』（劉子澄は朱熹の門人）を含め、朱熹関連の書籍からの引用である。良斎が朱子学を尊重していたことは当然であろうが、後掲する明代の王守仁（陽明）からの非引用に比し、特徴的な傾向と考えられよう。

また、上巻との関連で、『武林旧事』の撰者周密と『齊東野語』の撰者との一致に着目したい。

<元、明>

- 宋史 (3) ③⑱〔下：⑳〕
- 宛委余編＝王世貞 (2) ⑤⑳
- 宋学士文集＝宋濂 (2) ⑦〔下：⑪〕
- 湧幢小品＝朱国禎 (2) ⑮⑱
- 金史 (1) ⑱
- 元史＝宋濂ら (1) ⑱

- 赤雅=湛若水 (1) ㉒
- 天中記=陳耀文 (1) ㉔
- 堯山堂外記=蔣一蔡 (1) ㉕

上記書以外に、下巻に引用されている典籍は以下の通りである。

- 名義考=周祈 (1) [下: ⑤]
- 文海披沙=謝肇淛 (2) [下: ⑦⑨]
- 大明一統志 (1) [下: ㉔]
- 梅花百詠 (1) [下: ㉑]

この時代における引用書では、『元史』の編者宋濂と『宋学士文集』の作者との関連が注目される。また、上⑰「震天雷 (投石のための機械)」の標目下に、『金史』・『元史』のほか、『湧幢小品』からの「魏唐以来、火箭、射梯、巨礮 (巨砲のこと)、飛石」との五標目を見出しとして、三書からの引用となっている。

<清>

- 抱經堂文集=盧文昭 (1) ①
- 日知録=顧炎武 (1) ⑥
- 經義叢鈔=王引之 (1) ⑥
- 十七史商榷=王鳴盛 (1) ⑭
- 淶水亭雜識=納蘭性徳 (2) ⑯ [下: ⑳]
- 陔余叢考=趙翼 (4) ⑯⑰⑳㉑
- 明史 (1) ㉑

これらの引用書のうち、『陔余叢考』の頻出が注目される。この書は、趙翼撰の論説記事を主として掲載しており、全42巻に及ぶ。上巻においては、「⑯鳥銃・⑰震天雷・⑳弁服・㉑碑」の四標目に見られる。「鳥銃」とは、『陔余叢考』によれば、「中国鳥銃利器也云々」と記されている。

上記のほか、下巻に引かれている書籍は次の通りであるが、中国の既述の時代における引用書に比し、その種類の多様さが目につくのである。

- 養新録=錢大昕 (1) [下: ⑮]
- 白田雜著=王懋竑 (1) [下: ㉑]
- 四庫全書総目提要 (1) [下: ㉑]
- 擘經室集=阮元 (1) [下: ㉑]
- 学画浅説=王概 (1) [下: ㉒]
- 随園隨筆=袁枚 (1) [下: ㉓]
- 庭立紀聞=梁玉繩 (1) [下: ㉔]
- 東華録=蔣良驥 (1) [下: ㉕]
- 四庫全書総目彙刻書目 (1) [下: ㉖]

なお、『南柯餘編 (中巻)』に関しても、各標目に対して、引用典籍の調査は終了しているのであるが、上・下巻との対比に応じ、更に検討を加えるべく、紙数の関連もあって次稿でまとめることとした。

本稿は、論文にも記したが、平成13年3月4日に開催された、福島県立博物館主催の講演会において、「安積良斎の漢詩の世界」と題して講演した内容の補足をなすものである。当日ま

で、高橋富雄館長はじめ、多くの方々の助言・援助をいただき、本稿完成の資ともなった。ここに誌して、謝意を表したい。